広西における上帝会の発展と金田団営

菊　池　秀　明

はじめに

近年における中国史研究の変化は、新史料の発掘による歴史像の再構築という動きであろう。なかでも清朝政府の公文書であった檔案史料の公開は、従来編纂された史料集や地方志レヴェルでしかわからなかった歴史の具体像を我々に開示することになった。また中国近代史研究における新史料の発見は、それぞれの時代の政治的要請に基づいた一面的な歴史認識の見直しを可能にした。かつて中国革命の先駆者として称えられ、現在はその破壊的側面が強調されることの多い太平天国運動（1850–64 年）も例外ではなく、今こそ客観的な立場からこの運動の実像を解明する必要性が高まっている。

さて太平天国史研究において最も難しいのは、残された史料が少ない金田蜂起以前の歴史である。かつて筆者は広西東南部におけるフィールドワークの成果に基づき、移民社会のリーダーシップを握った科挙エリートと非エリート間の対立が、この運動を生んだ基本原因であったことを明らかにした[1]。また別稿では洪秀全の青年時代における広東の社会矛盾を分析し、学政李泰交の自殺事件は洪秀全に科挙試験の公正さに対する疑問を抱かせ、彼の見た「幻夢」は広東社会にその祖型となる物語が存在したこと、モリソンによる伝道書の出版事業はかなりの規模で行われ、洪秀全が『勧世良言』を入手したのは禁圧強化前の 1833 年であったと考えられることを指摘した。さらに洪秀全が『原道醒世訓』で提起した大同ユートピアは他の読書人にも類例が見られ、洪秀全は「私心」の現れとして広東の械闘や排外事件を批判的に見ていたこと、広州の外国人居住区外で行われたロバーツの布教は厳密に言えば条約違反であり、上帝会がカトリック解禁の事例にならって禁圧を免れたのは全くの幸いであったと述べた[2]。

本稿は広西における上帝会の勢力拡大と金田団営（団営とは会員が集結することをさす）に至る経緯の分析を目標としている。初期太平天国史の核心部分であるこの時期の歴史については、すでに中国人研究者による業績が数多くあり[3]、王慶成氏による『天兄聖旨』の発見によってその内容も豊富となった[4]。また鍾文典氏は長年にわたる実地調査の成果をもとに、広西各地における上帝会の発展過程を具体的に描き出した[5]。さらに日本では小島晋治氏、市古宙三氏がこの時期の歴史にしばしば言及しており[6]、アメリカのJ. スペンス氏 (Jonathan Spence) は「神の中国における息子 (God's Chinese Son)」というユニークな観点から洪秀全と上帝会の活動を解釈しようと試みた[7]。

本稿はこれらの先行研究に学びつつ、筆者が 1989 年から 2007 年までに行ったフィールドワークの知見と 1999 年から台湾の国立故宮博物院で収集した檔案史料を手がかりに検討を進めたい。具体的には①1847 年の偶像破壊運動と王作新による上帝会告発事件、②楊秀清と蕭朝貴による天父天兄下凡と洪秀全の思想的変化、③武装蜂起の準備と来土械闘、④上帝会と団練の衝突事件と天地会蜂起、団営令の発布について取り上げる。これらの分析を通じて、現在なおヴェールに包まれている太平天国の誕生について、その真実の姿に迫りたいと考えている。

1. 神々の相克——偶像破壊運動と天父天兄下凡

(a) 洪秀全の偶像破壊運動と王作新の告発事件

1847 年 3 月に洪秀全は広州にいた宣教師ロバーツのもとで聖書を学んだが、経済的庇護を目当てにしているとの誤解を受けて洗礼を拒否された[8]。科挙受験に続く 2 度目の挫折を経験した洪秀全は再び広西をめざし、8 月に桂平県紫荊山で上帝会を組織していた盟友の馮雲山と再会した。この時洪秀全が目にしたものは、紫荊山内の客家人を中心に数県の範囲におよぶ 2,000 人余りの信者の姿であった。この事実に自信を深めた洪秀全は、上帝教の教義に基づく新たな行動である偶像破壊運動に踏み切ったと言われている[9]。

この偶像破壊運動は太平天国の蜂起後も各地で継続され、廟や寺院に対する徹底した攻撃によって、のちに曾国藩が「鬼神も共に怒るところ」[10] と記したように、社会秩序の破壊者としてのイメージを深く刻み込むことになった。それではこの運動はいかなる背景のもとに生まれたのであろうか。

まず考えられるのはキリスト教とくにモーゼの十戒に代表される『旧約聖書』の影響であろう。洪秀全がキリスト教と接触するきっかけとなったプロテスタントの伝道書『勧世良言』は、中国人が「無数の神仏像を造って拝んでいる」ことをくり返し批判し、「死物に向かって庇護を求めるとは、まことに笑うべきであり、実に哀れむべきである」[11] などと述べている。この偶像崇拝の否定は梁発が『勧世良言』において最も強く主張した内容であり、それを読んだ洪秀全が影響を受けたのは当然のことであった。

また興味深いのは、洪秀全のキリスト教理解が『旧約聖書』の前半部分に偏っていたという事実である。E. P. ボードマン (Boardman) 氏および夏春濤氏の研究によれば、洪秀全が引用した聖書の語句は多くが旧約の前半五書、すなわち創世記から申命記までからであったという[12]。偶像崇拝を禁じたモーゼの十戒はその核心部分に当たる。洪秀全はロバーツのもとで旧約、新約の聖書全文を読んだが、梁発の偶像崇拝批判に影響を受けた彼が、旧約の前半五書に注目したのは自然な結果であったと考えられる[13]。

それでは洪秀全はなぜ偶像崇拝を否定するにとどまらず、これを破壊するという行動に出たのだろうか。よく知られているように、『旧約聖書』は元々ユダヤ教の経典であった。それは唯一神であるヤーヴェと人間の契約の記録であり、キリストによる罪の贖いという主題

が欠けている分、ヤーヴェは時として激しく「不寛容 (Intolerant)」な存在として立ち現れた。太平天国は南京到達後に『欽定旧遺詔聖書』を刊行したが、そこでは「皇上帝は汝の上主、すなわち烈気の上帝である。もし朕を恨む父親がいれば、朕はその罪を三、四代先の子孫にまで問う」[14] と述べている。また同書巻三、利未書（レビ記）は再び偶像崇拝を禁じたうえで、これを守らない者に次のような制裁を加えると記している。

> 朕の言葉を聞かず、反抗するならば、朕は激しい怒りをもって立ち向かい、なんじらの罪に七倍の懲らしめを加える。なんじらは自分の息子や娘の肉を食べるようになる。朕はなんじらの聖なる高台を破壊し、香爐台を打ち壊し、倒れた偶像の上になんじらの死体を捨てる。朕の心がなんじらを退けているからだ。またなんじらの町々を廃墟とし、聖所を荒らし、なんじらがそこで献げる宥めの香りを受け入れない。[15]

ここに現れる愛憎激しい皇上帝の姿は、信者の一人であった忠王李秀成（藤県大黎郷人）の「上帝を拝む者は救われるが、拝まない者は蛇や虎に襲われる」[16] という供述に通じる部分を持っている。またこうした制裁を免れるためには、自らを神の意志の代行人と位置づけ、偶像崇拝を否定する直接的な行動を起こすことが不可欠と考えられた。

さらに別稿で指摘したように、読書人出身の洪秀全は儒教の強い影響を受けていた。彼は紫荊山に到達する前にも、貴県で少数民族の恋愛神だった六烏廟を「淫奔で野合した奴」と呼んで排撃の詩を作った[17]。儒教も偶像崇拝に対しては否定的で、正統論の立場から異文化の習慣に対して「男女の関係については甚だ分別がない」[18] といった批判を加えることが多かったためである。これに洪秀全のパラノイア的傾向や「暗愚で教義にこだわり頑固」[19] と評されたロバーツの性格が加わり、上帝教の「邪を斬り、正を留める」という排他的かつ攻撃的な教義が形成されたと考えられる。つまり偶像破壊運動はユダヤ・キリスト教と儒教という二つの正統論が生み出した産物だったと言えよう。

それでは洪秀全らが排撃の対象とした神々は、いかなる特質を帯びていたのであろうか。鍾文典氏の研究によれば、桂平県に存在した大小の廟宇、寺院は 297 ヶ所に上った[20]。1847 年 10 月に洪秀全らが破壊したのは象州三江口の甘王廟であったが、同じ甘王廟は紫荊山の南に位置する南木郷の弩灘にも存在した。民国『桂平県志』によると、この地域では 3 年から 5 年に一度催される「齋醮」が盛んであり、県城付近では甘王や三界（金田新墟の三界廟に祀られた主神）、チワン族の多い西部地区では六烏娘を担いで村々を巡り、疫病を追い払う儀礼が行われた[21]。唐曉濤氏の調査によれば、これらの神々は科挙エリートを含む地域社会の信仰を集めたもの、十数ヶ村からなる村落連合によって崇拝されたものと様々であったが、必ずしも明確なヒエラルキーが形成されていた訳ではなく、一つの廟に複数の神々が祀られるケースも多かったという[22]。

次にこれらの神々は、人々のいかなる想いや社会関係とつながっていたのだろうか。象州

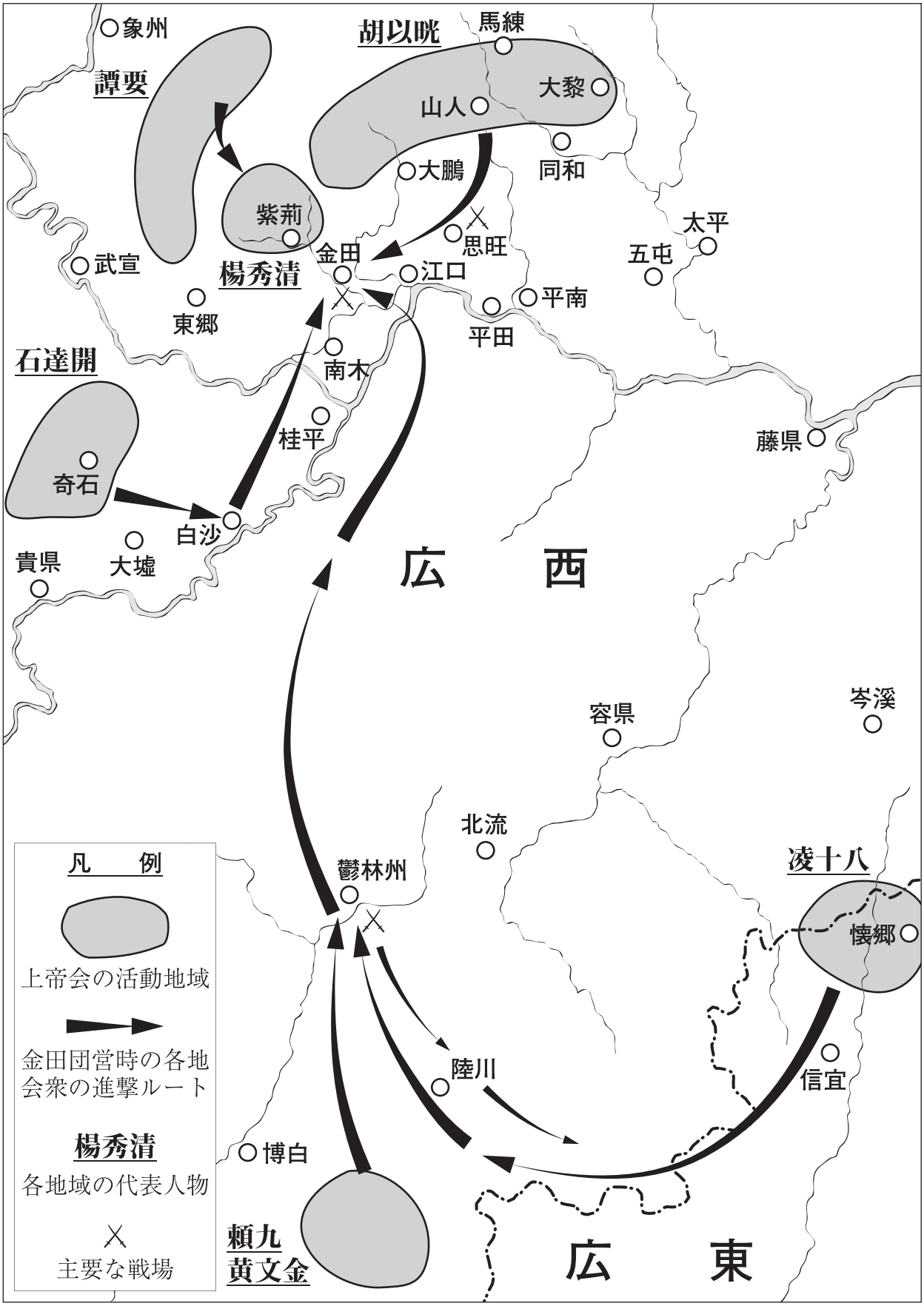
における甘王廟破壊の後、洪秀全と馮雲山らは紫荊山蒙冲の三聖宮を打ち壊した。この三聖宮は雷廟と五穀廟を併せ祀ったもので、道光元年 (1821) に建てられた『始建三聖宮碑記』は次のように述べている。

> およそ名だたる師を生んだ豊かな郷を見れば、立派な祠や壇が建造されていない場所はない。その庇護によって幸福を与えられ、人材が生まれて富貴になるのである。わが蒙冲は先祖が五穀諸神を水辺に祀り、雷神を木山（即ち鵬隘山）中に祀った。この二廟は□勝でもなく、長年の傷みが進んでいた。私（総理の王東城）は愚かであったが、父老たちに経営を委ねられ、あちこち見て回った結果この場所を得た……。父老は皆この地が気に入ったので、酒を並べ記名をして共に事業を助けた。時に嘉慶乙亥（20 年、1815）の冬に工事が始まり、丙子（21 年、1816）の夏に落成した。[23]

ここでは辺境の入植地を人材の多い豊かな場所に変えたいという人々の願いが告白されている。この時「総理」としてリーダーシップを握ったのは「紫荊四富」の筆頭であった石人村王氏の三代王東城であり、「経理」となって補佐したのは大冲村曾氏の三代曾開文（原籍広東揭陽県の客家人）であった。やがて石人村王氏と大冲村曾氏は蒙冲にある耕地の所有権をめぐって争った[24]。また紫荊山に入った馮雲山を塾教師に迎えたのは曾開文の甥にあたる四代曾玉珍であり、象州甘王廟の破壊に同行した五代曾雲正は曾玉珍の息子であった。さらに象州からの帰還後、洪秀全を貴県賜谷村へ送った四代曾玉璟は曾開文の子で、金田団営に参加して永安州まで至ったが、密かに帰郷して家族を連れ出そうとしたところを「仇家（恐らくは石人村王氏）」に捕らえられて殺された[25]。上帝会の活動が神々をめぐる地域の社会関係に否応なく関与していった様子が窺われる。

象州における甘王廟の破壊は、「噂は遠くまで広がり、信従する者がますます多くなった」[26] とあるように上帝会の知名度を高めるのに役立った。だがその代償として、廟信仰に結集していた有力移民たちの反発を買った。蒙冲三聖宮の総理を担当した石人村王氏の四代王作新（武宣県生員）はその代表で、彼は 1847 年 12 月と翌年 2 月の 2 度にわたって馮雲山を捕らえ、「上帝を拝めとの妖書に借りて社稷神明を踏みにじっている」「ヨーロッパの旧約聖書に従い、清朝の法律に従おうとしない」[27] などと桂平県へ訴えた。

石人村王氏も原籍広東嘉応州の客家人で、1754 年に紫荊山へ移住した。彼らは山内の開墾事業を手がけて経済的基礎を整えたが、大冲村曾氏との違いは科挙エリート育成の努力にあり、石狗村に住んだ四代王大作（王作新の堂兄）は廩生、その息子王徳欽は同治年間挙人となった。また言い伝えによると、初め王作新らは馮雲山と付き合いがあったが、私塾の門に張られた対聯に「逆謀」の気配を感じ取り、以後交際を絶ったという[28]。その実王作新らは、1830 年代に紫荊山麓の金田で保甲組織である安良約を作った古程村の黄体正（嘉慶年間挙人）と同じく、社会の変動を敏感に察知して対応を試みた地域リーダーだったと言え



太平天国の金田団営図（1850 年）

るだろう[29]。

この王作新の告発事件については太平天国の蜂起後に清朝側の調査が行われ、ほぼその全容が明らかになっている。初め桂平県知県の王烈は、王作新が馮雲山らを陥れるために「捏飾」の訴えを起こしたと見なし、双方を呼び出して取り調べることにした。一度は上帝会員に救出された馮雲山は再び捕らえられ、王烈の尋問を受けたが、「悖逆」の形跡は見あたらなかった。また王作新は外出を理由に召喚に応じず、この間に共に捕らえられた会員の盧六が獄中で病死した。

すると5月に今度は馮雲山が王作新を潯州府へ訴え、知府顧元凱らの取り調べを受けた。この時馮雲山は中国の古典を引用しながら上帝崇拝の正当性を説き、広東のカトリック教会にキリスト教解禁の告示が張り出されていると主張した。また彼は王作新が生員資格を武器に横暴を働いていると訴えた。結局馮雲山は中国内地のカトリック信者を処分した前例にならい、「無籍游蕩」との理由で広東へ送り返された。またこの判決を知った王作新は、曾玉珍が江口司巡検の王基に賄賂を送ったと署広西巡撫周天爵に訴えたが、それは王作新の誤解であったことが明らかになったという[30]。

この王作新の告発事件は上帝会が初めて体験した外部との摩擦であり、実質的な創設者であった馮雲山が長期にわたって監禁されたことは会衆の間に動揺を引き起こした。また3月に洪秀全はキリスト教解禁の交渉を務めた両広総督耆英に馮雲山の釈放を訴えようと広東に向かい、その資金獲得のために科炭と呼ばれる会員の相互扶助制度が作られた。1849年から平南県と広東信宜県で上帝会員の投獄事件が発生すると、次節で検討する蕭朝貴（後の西王）が中心となって科炭による救出活動が行われている[31]。

(b)　楊秀清、蕭朝貴の天父天兄下凡と洪秀全の思想的変容

馮雲山が捕らえられ、洪秀全がその救出に奔走していた1848年4月と10月に、広西の上帝会には重大な変化が発生した。楊秀清と蕭朝貴による天父、天兄下凡すなわちヤーヴェとイエス・キリストの降臨の始まりである。

後に東王となる楊秀清は原籍広東嘉応州の客家人で、紫荊山の奥にある鵬隘山の東旺冲に住んだ。両親を早く失った彼は貧しく、炭焼業を営んでいた[32]。また蕭朝貴は元々武宣県の人であったが、蕭玉勝の養子となって鵬隘山に移り、楊秀清の隣人となった。蕭玉勝は安良約に献金をしてその名を碑文に刻まれるなど一定の経済力を持っていたが、蕭朝貴は蕭玉勝の実の息子である蕭朝隆との間に争いが絶えなかったという[33]。

当初無名の会員に過ぎなかった二人が注目を集めたのは、馮雲山の逮捕によって「兄弟達の間に騒動と軋轢が起こった」[34]時期のことだった。『天情道理書』によると、4月に初めて下凡した天父は、「東王（楊秀清）の尊い口に托して兄弟姉妹を教え導いた」[35]とある。また『天兄聖旨』巻一はキリストが最初に降臨した様子を次のように記している。

（1848 年 10 月）天兄は心を痛めて下凡され、憐れみを垂れて世を救おうとされた。鵬隘山でのことである。蕭朝隆が罪を犯し、処罰すべきことを一つ一つ洪秀全に示そうとされて、蕭朝貴の尊い口を通して告げられた。「朕はイエスである。指示を聞きたい者がいれば、蕭朝貴を通じて、お前の面前で話をしよう」……。

十月二十四日、鵬隘山で天兄は洪秀全を諭して言われた。「弟洪秀全よ、おまえは朕を知っているか」。洪秀全は答えた。「存じております」と。[36]

ここで天兄は自己紹介し、洪秀全に「おまえは朕を知っているか」と尋ねて蕭朝貴の天兄下凡を承認するよう求めている。かつて広西では降僮、三姑などと呼ばれる南方系シャーマニズムが盛んに行われた。光緒『貴県志』によれば、これらのシャーマンは「寡婦に代わって死んだ夫を尋ね、若死にした子供の魂を探す」と宣伝した。そして信者が供え物を献げて焼香すると、「両手をテーブルに乗せ、首をうなだれてつぶやく。しばらくすると首を伸ばし額にしわを寄せ、何ごとか唱え始める」という。シャーマンが何か言い当てると、人々は驚いて真実と思い込み、「死者の魂と対面するや、夫と死に別れた者は泣き出し、失った子供を思う者は嗚咽して一言も発せられない」[37] と記している。

また王慶成氏の紫荊山における調査によれば、降僮は如来仏や甘王、譚公爺爺（清初にこの地方を平定した軍人）などの中級神を降臨させ、病気の治療法や男の子の出産方法などを伝授した。僮子と呼ばれたシャーマンは普通専業の男性で、降僮を行なう時には上半身裸となり、地面に激しく叩頭を繰り返してトランス状態に入った。このため僮子は皆額に瘤があり、瘤が大きい程霊験あらたかとされたという [38]。

これらのシャーマニズムは台湾の童乩と同じく非エリートの基層文化と呼ぶべきもので、洪秀全は『原道救世歌』の中でこれを「第五の不正は巫覡なり」[39] として禁じていた。だが信徒たちがしばしば「霊に乗り移られて勧めの言葉、預言等々を発」すると、彼は楊秀清と蕭朝貴のそれを「まことなり」[40] として公認するに至った。それでは洪秀全はなぜ上帝教の教義を変えてまでシャーマニズムを容認したのだろうか。

武内房司氏の研究によると、明清時代の中国には降僮や童乩とは別に、扶鸞とよばれる下層知識人の加わった降神儀礼があり、王朝政府の民衆教化政策であった宣講と結びついて、貴州や四川の抗糧暴動や宗教結社の活動と密接な関係を持った [41]。同じことは広東にも当てはまり、1830 年に刊行された『粤屑』は「扶乩」によって降臨した宋代の文人蘇東坡と詩文を競ったエリートの物語などを載せている [42]。

また当時の知識人のあいだで神意を問うという行為が広がりを持っていたことを示す例として、1856 年に発生した徐徴の「菩薩賜諭」事件がある。徐徴は江蘇金匱県人で、捐納によって浙江の官員となり、嘉興府通判提挙銜に叙せられた。この年太平軍が江南大営への攻勢を強めると、徐徴は浙江巡撫の何桂清が杭州知府王有齢の意見を盲信し、戦局を悪化させていると考えた。そこで彼は北伐軍を敗退させた僧格林沁らの軍を江浙に派遣するように求

める上書を提出した。また日頃から信心深かった徐徴は、夢の中で「観世音菩薩」から降されたお告げをその付録に添えた。

現在台湾の国立故宮博物院には、徐徴が提出した「菩薩賜諭」の抄本が残されている。そこで観音は「現在人々の心には善が少なく悪が多く、淫貪奸詐の念が重すぎて、誤った道に陥った……。このため天は刀兵水火、瘟疫凶荒の災害を降し、すでに数年になる。また巧数は均しく三塗地獄の劫に入り、苦海は無辺で、これを悔いても及ばない」と述べている。また「忠孝節義」の人々だけが情勢を挽回できるとしたうえで、官民の区別なく「天に対して過ちを改め善に向かうとの誓いを立て、毎朝香を焚いて聖人大学の書を跪いて読み……、女子は南無阿弥陀仏を一百二十回唱えれば、一切の劫難地獄の苦しみを免れることが出来る」と告げている。さらに人々が「人の道を行えば、国は治まり民が安んじる日が訪れ、共に太平の福を楽しむことが出来るのだ」[43] と諭している。

この徐徴が見た夢のお告げは、天京事変によって楊秀清が死亡した後の太平天国において洪秀全がしばしば下した「夢兆の詔」[44] に通じる部分を持っている。だがエリート、非エリートの区別なく、当時の人々のあいだに混乱した世界を生き延びる術として神々の託宣を求める傾向が強く存在したことは否定できない [45]。天父・天兄下凡が始まった当時、上帝会の中には「イエスの教えに悖ったことを言」って除名された黄姓（黄二妹）[46] や「妖魔の托降」によって処罰をうけた象州の李来得 [47] など、多くのシャーマンが活動していた。洪秀全はこれら会内の混乱を収拾するために、「聴衆に深い印象を与えた」[48] 楊秀清らの活動を公認する必要があったと言えよう。

ところで天父、天兄下凡の開始は、上帝会の組織と洪秀全の思想に大きな変化をもたらした。1848 年 11 月に下凡した天兄は、洪秀全の「太平の時の軍師は誰か」という質問に対して、「馮雲山、楊秀清、蕭朝貴はともに軍師である」「馮雲山は三個星、楊秀清も三個星、蕭朝貴は二個星だが、楊秀清と蕭朝貴は雙鳳朝陽である」[49] と述べている。上帝会はもともと馮雲山が創設した組織であったが、楊秀清と蕭朝貴の二人が馮雲山と並ぶ地位を獲得したことを示している。

また楊秀清は 1848 年と 1850 年の二度にわたり、「つぶさに苦しみをなめ、口はきけず、耳は聞こえず」「耳から膿が流れ、目からも絶えず涙が流れ出した」[50] という病気に冒された。だがその結果彼は「自ら進んで他人の病気を引き受け」「病を治す力があると信じられていた」[51] とあるように、特殊な能力を帯びた異人と考えられるようになった。

この身体的異常を抱えた救済者が人々の苦難を贖うというモチーフは、中国の民間宗教に広く見られる現象で、1796 年に四川で蜂起した白蓮教反乱では、あばたのある醜男が弥勒仏の生まれ変わりである牛八に選ばれた [52]。また日本の一向一揆でも平家語りとよばれる盲目の琵琶法師が、信者集団の中核として大きな役割を果たしたという [53]。つまり天父、天兄下凡によって上帝教はキリスト教との距離を広げ、中国ひいては東アジア社会の習慣に根ざした土俗的な宗教へと変質したのである。

天父、天兄下凡に伴う上帝会の変化において、次に指摘すべきは後に北王となる韋昌輝（桂平県金田村人）の登場であった。韋昌輝はチワン族と同化した漢族移民の子孫で、経済的には豊かであったが、購入した監生身分をめぐって冤罪事件に巻き込まれるなど有力移民の差別と迫害に悩んだ[54]。1849年10月に下凡した天兄は、韋昌輝の父親であった韋源玠に「なんじの子韋正（韋昌輝をさす）の身体はなんじが生み育てたものだが、天にあっては朕の弟であり、なんじは彼を馬鹿にしてはならぬ」[55]と命じている。以後韋昌輝は蕭朝貴と行動を共にして下凡の場に立ち会い、天兄が命じた処罰の執行や蜂起の具体的準備を担った。金田団営後に彼は「天王の軍師」[56]と呼ばれたという。

だが天父、天兄下凡が上帝会にもたらした最大の変化は、洪秀全をヤーヴェの次子、キリストの弟としてその絶対的権威を強調すると共に、彼が来たるべき新王朝の君主であると主張して、上帝会の活動を宗教運動から政治運動へと変質させたことにあった。

1848年4月に初めての天父下凡を行った楊秀清は、洪秀全こそはヤーヴェが人々を救済するために派遣した「天下万国の真の主」[57]であると述べた。また同年12月に下凡した天兄は洪秀全と次のような対話を交わしている。

> 天王は尋ねた「私が天に昇り（洪秀全の幻想を指す）、天父、天兄が私を地上に遣わした時に、家の門首に『天王大道君王全』と記された紙が掛かっていましたが、これはどういう意味なのでしょうか？」。
>
> 天兄は答えた「おまえは忘れたのか、この七字は天よりもたらされたものだ。あの時天父と朕は（おまえに）兵権を与え、この七字を門首に掛けて証拠としたのだ。おまえは天で悪魔と戦い、天父はおまえを天王大道君王全に封じたのだ」……。
>
> 天兄キリストはまた天王を諭して言われた「わが弟洪秀全よ、およそ天兵天将が妖魔の頭を殺すには、天父上主皇上帝の命令、救世主キリストの命令、天王大道君王全の命令を受けなければならない。ただしお前は王を名乗っても、帝を名乗ってはならない。天父だけが帝を名乗ることが出来るのだ」。[58]

ここで下凡した天兄キリストは洪秀全を「わが弟」と呼び、彼とヤーヴェが洪秀全を「天王大道君王全」即ち新王朝の君主に封じたのだと宣言している。また洪秀全は「妖魔の頭」を殺す「兵権」つまり清朝を打倒する地上の王権を与えられたこと、その時に彼は王の称号を名乗って良いが、皇帝を名乗ることは許されず、「帝」の称号は天父のみに与えられるものであることが語られている。

古来中国では易姓革命の思想があり、天から命令を受けることは旧王朝に代わって王権を与えられることと考えられて来た。このため洪秀全の幻夢とヤーヴェからの受命について聞いた楊秀清らは、彼が単に偶像破壊と人々の倫理的覚醒を命じられた者とは受け止めなかった。彼らは洪秀全こそは民間宗教において繰り返し説かれた「真の君主」であり、「天父、

天兄がおまえ（洪秀全）に権威を与える。おまえは兄弟達を率いて、共に天下を平定して人々に見せなければならない」[59] とあるように、地上の天国を樹立する使命を受けた者と考えたのである。この上帝会の政治結社への変容は、上帝教におけるキリスト教の中国化が行き着いた終着点であった [60]。

こうした上帝会の変容を前に、1848 年に洪秀全は『原道覚世訓』を執筆して激しい歴代王朝批判を展開した。ここで洪秀全は人々が「閻羅妖」への崇拝をやめ、上帝への信仰を回復することを訴えた。また彼は始皇帝以来の中国の歴代皇帝がヤーヴェを敬わず、神仙や玉皇大帝を崇拝したことを「水源の汚れ」「皇上帝を冒瀆するもの」として激しく批判した。とりわけ『天兄聖旨』のヤーヴェだけが「帝」を名乗ることが出来るとの主張に基づき、皇帝の称号を用いた彼らを「身の程を知らぬ尊大な奴」であると断じた。この洪秀全の論理に従えば、時の清朝皇帝であった道光帝も「永遠に地獄の災いを求める者」[61] に他ならなかった。

それでは洪秀全の思想的変容は、楊秀清と蕭朝貴のシャーマニズムに引きずられた結果であったのだろうか。洪仁玕『欽定英傑帰真』は、青年時代の洪秀全が時勢を論じる度に悲憤慷慨し、清朝の支配とアヘン交易によって「中国の民は豊かな者でも貧しくならざるを得ず、貧者が法を守れなくなるのは当然ではないか」[62] と語ったと述べている。だがそれは太平天国建国後の言説であって、そのまま鵜呑みにすることはできない。

むしろここで注目すべきは、太平天国当時の広東におけるエリートたちの抗官風潮であろう。1851 年に広東南海、東莞二県で科挙の受験生が試験をボイコットする動きが広まり、試験が中止されるという事件が発生した。

檔案史料によると、南海県では仏山鎮にある義倉の経費を西湖書院の経費に一部充てることになったが、異論が出たため、広州府知府の張百揆は貧民救済を優先してこの経費を義倉に戻すことにした。するとこの決定に不満な西湖書院の学生たちは張百揆を告発する「匿名の紅帖」を両広総督徐広縉の轎に投げ入れ、張百揆が更迭されない限り科挙試験に応じないという「合府士子の公咨」を貼り出した。

また東莞県の事件は 1850 年に納税の督促のために農村へ赴いた知県邱才頴が、「抗糧不完」だった生員の黎子驊を役所へ連行して尋問したところ、罪を恐れた黎子驊が狂人を装い、自らうなじを切って死亡したことがきっかけだった。黎子驊の遺族が役所の虐待を訴えると、「積欠があって完納していない者」たちが試験をボイコットするように呼びかけた。事態の悪化を恐れた政府が邱才頴を解任したところ、「士民たちはついに試験をボイコットすれば官吏を更迭させることが出来ると信じた」[63] という。

こうした広東の抗官風潮について、両広総督徐広縉は次のように述べている。

> 道光二十一年 (1841) に夷務が起こって以来、官民はややもすれば齟齬が多かった。士習は日に壊れ、民も騒がしくなり、もはや習慣となって挽回は容易ではない……。

道光二十七年 (1847) 以前では、廉州府知府の余保純がイギリスの攻撃を受け、將軍参贊の命を奉じて城を出て講和した。この時に士民は何も言わなかったが、府試を行うと突然役所に詰めかけて試験を妨害し、ついに知府を解任させた。現嘉応州知府の文晟が番禺県知県だった時には、受験生が答案用紙の価格を下げるように求めて役所に詰めかけ、試験を妨害したが、調停して事なきを得た。前徳慶州知州の馮晉恩が東莞県知県だった時に、雨乞いの効果があがらないと、士民たちは祈り方が悪いと言って香火で彼のヒゲを半分焼いてしまい、解任に追い込んだ。

その他にも官に抵抗して役人を殴る者は、他の者を派遣しても同じなので、上司に隠して言わないか、無かったことにしてしまう。こうした悪習は日一日と激しくなっているが、その抵抗の理由を考えてみると、試験の妨害はその一端にすぎず、実はこれに借りて圧力を加え、抗糧の計を遂げようとしているに過ぎない。

さらに徐広縉によると、1851 年に長年未納の錢糧を免除することになったが、前年の分は「民欠」とは言えないので、例年通り徴収しようとした。だが東莞県の人々は後から出された命令が「地方官の捏造」だと言って、納税の告示を取り去ってしまった。また「役人が下郷して納税を督促したら、これを縛って殴れ」と命じる流言が飛び交った。さらに東莞県の受験生が試験をボイコットすると、南海県の人々もこれに従ったという。そして徐広縉は「このように法をもてあそんで教化をはばみ、意地を張って抵抗するとは、全く話にならない」[64] と結んでいる。

ここからはアヘン戦争と広州入城をめぐる清朝、イギリス間の衝突事件をきっかけとした、広東のエリートたちの地方政府に対する強い不信感が確認できよう。むろん彼らの批判はあくまで「抗官」すなわち地方官への抵抗や納税拒否、科挙試験のボイコットに止まり、清朝支配の正当性そのものに疑問を投げかける動きは起こらなかった。楊秀清と蕭朝貴の天父天兄下凡が洪秀全に与えた思想的影響とは、こうした体制内の枠組みに収まることの必然性を相対化したことにあった。いわばシャーマンたちの「神の手」は、政府への怒りに満ちた知識人の背中を後押しする役割を演じたのである。

2. 地上の胎動——武装蜂起の準備と金田団営

(a) 武装蜂起の準備と来土械鬪

上帝会がいつごろ武装蜂起をめざすようになったのか、『天兄聖旨』の記載は必ずしも明確ではない。1849 年 1 月に下凡した天兄は洪秀全のいとこたちに、「洪秀全を早く金竜殿に坐らせる」[65] ように天父に懇願せよと命じている。またその後も天父は会衆に「堅耐」「遵正」すなわち辛抱強く耐え、正しい道に従うべきことをくり返し命じた。例えば 12 月に平南県で下凡した天兄は、「外人の勒索」によって散財した林大端（路三里平田村人、後の章王林紹璋の一族）に「天父を敬うのはどんな良いことがある？」[66] と問いかけ、その心を試

している。また「男は馮雲山に学び、女は胡九妹に学べ」[67] というスローガンが唱えられたのもこの時期であった。

1850 年に入ると、蜂起の準備が始まったことを示すいくつかの事実を確認できる。例えば 2 月に紫荊山に多くの会員が集まり、下凡した天父から「逐一超升して、それぞれの魂は天堂に昇った」とあるように、一種の催眠術によって教えを受けた。その集まりで天兄は、曾天養（後の西征軍主将、桂平県宣二里古林社人）が 400 人を入会させたと言って賞賛し、「天堂に上りし時には、なんじを頂上の頂に封じる」[68] と約束した。また 4 月に下凡した天兄は、譚順添に「太平の事は決まった」[69] と宣言している。

むろん挙兵の準備は極秘裏に進められた。4 月に洪秀全が黄袍を試着すると、天兄は「身を隠せ。外部の者に見せてはならず、大事な計画を知られてはならない」[70] と洪秀全にクギをさした。また 2 月に平南県の上帝会を主催していた胡以晄（後の豫王、鵬化里山人村人）が財産を売り払って上帝会へ献げようとすると、天兄は「このことは秘密にする必要があり、軽々しくやるな」[71] という指示を与えている。

だが上帝会が地域社会への影響力を拡大するにつれて、様々な対立に巻きこまれるのは不可避のことだった。そのうち深刻な影響を与えた事件が、洪秀全が最初に活動の拠点とした貴県の混乱であった。『天兄聖旨』によると、1849 年 1 月に賜谷村を訪れた洪秀全らは、夜中に「妖魔」の襲撃を受けた [72]。また 9 月には「真の道を信じない者が乱語を伝揚」したため、天兄が洪秀全と馮雲山に金田へ避難するように命じている [73]。

また 1850 年 2 月に発生したのが「六屈軍務」と呼ばれる武力衝突であった。この時に上帝会を率いたのは後に翼王となる石達開（貴県龍山下里那幇村人）で、六屈村のチワン族であった周鳳鳴が率いる団練と戦い、「大軍で周鳳鳴の巣穴を破壊し、彼は恐れて逃れ去った」[74] とある。この戦いは李秀成が「上帝を拝む者は彼ら同士で、団練も団練でひとまとまりになり、それぞれ張り合って強さを競った」[75] と述べた上帝会、団練間の勢力争いの一つであり、貴県で発生した来土械闘の序曲をなす事件だった。

すでに別稿で指摘したように、貴県の来土械闘は県城に住む広東移民の政治、経済的優位のもとで、客家、土白話（漢族の早期移民）、チワン族という三つのエスニック・グループが残された利益をめぐって衝突した結果であった [76]。また檔案史料は太平天国前夜の広西における械闘の事例として、1841 年に西部の陽万土州で発生したチワン族黄卜能らの客家村落に対する襲撃事件について報じている。

広西巡撫周之琦の上奏によると、黄卜能の父親は 1824 年に「広東恵潮の客民」すなわち客家である黄徳亨から年 50 パーセントの利息で銭 5,000 文を借り、その後 5 万文余りを支払ったが、なお利息分数千文が足りないと取り立てを受けた。また李卜洸は 1822 年に恵州出身の客家である方老三から銭 2,000 文と米 2 石（銭 5,000 文に換算）を年 30 パーセントの利息で借り、1840 年までに 5 万文余りを支払ったが、やはり利息分を全額返済出来なかった。やむなく李卜洸は家や耕牛を抵当に入れて雲南土富州へ出稼ぎに行ったが、結局財産

を取り戻すことが出来ず方老三を恨んだ。さらに黄亜寅の父も黄徳亨から金を借り、黄徳亨に殴られた経験を持っていた。

この年 11 月に黄徳亨が仲間を率いて黄卜能の家に至り、未払い分の抵当として牛や豚を連れ去った。すると黄卜能は黄亜寅らと相談のうえ 56 名を集め、黄徳亨の家がある石村を襲って黄徳亨ら 7 名を殴り殺した。また黄卜能らは土富州へ逃げる途中に李卜洸と遭い、再び 96 人を集めて客家移民を襲撃した。彼らは蜜村で方老三ら 17 名を殺したほか、各地で客民が借金の抵当に奪った家を焼き払い、全部で 56 名の客家を殺害した。さらに彼らは取締りのために出動した官兵に抵抗し、3 名を死傷させた。

このとき捕らえられたチワン族は、地方官の取調べに対して「陽万地方は恵潮の客民がやって来て以来、土人の財産で奪い取られたものは数え切れない。客民は田地を占拠し、土人に土地税を押しつけたが、その凶悪な勢いに押されて、あえて事を構える者はなかった。その結果財産をもつ土人はみな搾取の被害を受け、貧しい者も余った利益を受けることが出来なくなって、人々はみな長く恨みを抱いてきた。このため一度殴って恨みを晴らそうとの声を聞けば、従わない者はなかった」[77] と述べている。

だが広西西部へ進出した客家は、多くが広東人の優勢な東部地域に定着できずに再移住した人々であり、彼らが必ずしも成功者であったとは言えない。じじつ百色庁に「寄居」していた広東監生の方際清は、地方政府の処理に対する不満を広州の両広総督衙門に訴えたが、その訴えは斥けられた [78]。また 1854 年に械闘が発生した広西東部賀県の客家たちは、その「偽示」の中で「なんじら土着の紳耆士民は、賀県に住むこと数百年、良い田やきれいな屋敷を独占している。兄弟たち（客家をさす）は僻地に住み、衆寡敵さずで、田を借り受けては重い小作料を払い、戸籍を得るために銀を支払うなど、様々な場面で辱めを受けてきた」[79] と主張している。つまりこれらの械闘は下層民の生き残りをかけた競争関係を示すものだったのであり、その故にこそ信者に「農夫の家、寒苦の家」[80] が多かった上帝会と無関係では済まなかったと言えよう。

ところで六屈村における上帝会と周鳳鳴の衝突は、エスニック・グループ間の対立の中にも交流と融合が進んでいたことを示している。もともと石達開の母親周氏は六屈村周文朝（五房）の家出身であり、二房出身の周鳳鳴とは同族の仲であった。また『天兄聖旨』には石達開の兄弟たちと並んで周氏五房である周鳳善の名前が見えている [81]。こうした民族矛盾のさなかに進んでいた漢族と少数民族の融合関係を示す事例として、檔案史料は 1833 年の広東海南島の黎族だった黎亜義らによる市場襲撃事件を挙げている。

黎亜義は儋州牙和村に住む「生黎」で、儋州で「木材の販売」をしていた「熟黎」の符元興らと面識があった。この年旱魃のために早稲が収穫できず、米価が高騰すると、黎亜義は符元興ら数名と黎族居住区で掠奪を働いた。だが途中恩平県や儋州出身の漢族で、黎族地区で雑貨売りや乞食をしていた楊亜四らと会い、互いの「貧難」について語ると、黎亜義は彼らに仲間に入るように勧めた。この時符元興は田頭墟の「客民」である許可安が木材の代金

を払っていないことを思い出し、彼の店を襲撃して鬱憤をはらそうと提案した。そこで彼らは黎族の村々で200名余りを集め、9月にまず王五墟にあった陳順興の店を襲った。だが墟民の抵抗に遭い、知州莫春暉の率いる官兵によって黎亜義は射殺された。また符元興と楊亜四ら「漢奸」20数名も捕らえられて処罰された[82]。

この事件は木材の代金支払いをめぐる漢族、黎族間のトラブルと並んで、少数民族地区に入り込み、黎族側に立って行動する漢族商人や移民がいた事実を伝えている。すでに筆者は別稿において、台湾の「番割」とよばれる同様の冒険商人について検討した[83]。また海南島では1851年に「土匪」の劉文楷らが「九姓の黎人」2,000名余りを動員し、儋州城を攻撃するという事件も発生したという[84]。

六屈事件後まもない1850年2月、貴県で天兄下凡を行った蕭朝貴は「遠方の兄弟が仲間に加わろうとしており、天兄は天王がこれらの人々を安撫すべきで、疑う必要はないと考え、ここに天王を教え諭した」[85]とある。ここでいう「遠方の兄弟」とは来土械闘に敗北して避難した客家をさすと考えられるが、その中には六屈村の周鳳善らや六合村熊氏（石達開の妻の一族）などチワン族も一部混じっていた[86]。むろんその数を過大に評価することは出来ないが、械闘と連動した上帝会の蜂起準備は新たな民族あるいはサブ・グループ間の境界を生み出す過程でもあったと言えるだろう。

(b)　各地の衝突事件から天地会の蜂起、そして金田団営へ

さて貴県が来土械闘で揺れている間にも、各地の上帝会をとりまく情勢は緊張の度を増していた。平南県では投獄された会員の救出が進まず、1850年4月には新たに中心人物である胡以晄が「団紳」の李炳章（鵬化里石門村人）に訴えられる事件が起きた[87]。また地方政府を含む団練との激しい衝突が発生したのは広東信宜県であった。

信宜県の上帝会指導者は凌十八（新図燕古村人）で、出稼ぎ先の平南県で学んだ上帝会を持ち帰った。彼は大寮村薛氏、蓮塘村羅氏、林垌村葉氏、河壩村李氏など新図の客家人を集め、旧図に住む陸敏務、陸達務兄弟（共に生員、水口村人）などの有力宗族と対立した[88]。1850年5月に凌十八に不穏な動きがあると知った信宜県知県宮歩霄は「罪を悔いれば追及しない」との勧告を行い、7月には凌十八の弟である凌二十四を監禁して解散を命じた。だが凌十八はこれに屈せず、かえって宮歩霄と陸滋務が「良民に変を逼まっている」[89]と告発する掲帖を貼り出した。

8月に知県宮歩霄が再び役人を派遣して上帝会員の欧品荘を捕らえると、凌十八らはこれを奪回して逮捕に協力した邱賢参（懐郷河背村人）の家を焼いた。事態を重くみた宮歩霄は科挙試験を中止し、陸達務、余士楨（従九品、洪冠高寨村人）、孔伝東（銭排竹垌村人）など新、旧両図の団練を動員して燕古村を包囲した[90]。『天兄聖旨』には指示を仰ぎに来た上帝会員の「外小（会員以外の者をさす。ここでは陸達務ら）が団練や妖（清朝のこと）の兵差らと協力して燕古村へ至り、各地を封鎖した。おそらく本月中には一度交戦することにな

ろう」[91] という報告が記されている。

また 9 月に入ると桂平県の白沙地方でも上帝会と団練の衝突が発生した。この地区の上帝会首領は秦日綱（後の燕王、祝多塘村人）で、「嶺尾村の賊」が後に北伐軍を率いる林鳳祥の預かっていた牛を奪ったことがきっかけだった。林鳳祥が牛を奪い返すと、翌日から嶺尾村の団練が二度にわたり報復のため林鳳祥の家へおしかけた。秦日綱らは 180 名の会員を集めてこの攻撃を斥けたという [92]。

こうした武力衝突に対して、天兄の指示は慎重であった。信宜県の会衆に対しては「現在は忍耐することが先であり、人に三尺まで譲れ」と命じ、白沙の事件についても十数名を残して撤兵させた。さらに 10 月に下凡した天父は次のように述べている。

> 洪秀全に伝えよ。くれぐれも秘密にし、先に名前を出すな。いまは旗をあげるべきではない。多くの兄弟が集まることが出来なくなってしまうからだ。近くの団（すなわち団営）はいまや新参者でいっぱいだ。また遠方の兄弟にあらかじめ多くの火薬を購入しておくように密かに伝えよ。一度知らせが届いた時に、すぐに集まれるようにしておくのだ。[93]

ここからは各地の会衆を確実に金田村へ集結させるべく、蜂起計画を極秘に進めていたことがわかる。また金田付近では新入会員を中心に団営が始まっていた [94] が、遠隔地ではまだ動員令が出されていなかった。その後信宜県では 9 月に凌十八らが団練を撃退して余士楨を敗死 [95] させるなど、エスカレートした衝突を完全に抑えることは出来なかった。しかし清代の多くの反乱において計画が事前に洩れ、失敗に終わった事実を考えると、上帝会の蜂起準備は周到だったと言わねばならない。9 月に天兄は韋昌輝に対して、「今や各地で団方が始まっているが、おまえは常に臨機応変に対処し、何かあれば柔軟に物事に当たれ」[96] と命じている。こうした上帝会の柔軟な活動を可能にしたのは、各地で天兄下凡をくり返し、会員の掌握につとめた蕭朝貴の存在が大きかったと考えられる。

さて上帝会の金田団営に至る歴史の中で、一つの画期となるのは広東に住む洪秀全らの親族を広西へ呼び寄せた時期である。それは 7 月 28 日のことで、この日下凡した天父は桂平県白沙旧合村に到着した洪仁達（洪秀全の次兄）に「何事につけおまえの弟がいる。おまえは彼の話を信じて、共に天下を取るのだ」と命じた。また洪秀全の妻賴氏には「太平主の妻」となることは容易ではないと説き、天条を守って子供の教育に努めるように諭している [97]。その後 8 月下旬に洪秀全とその家族は金田村へ移り、9 月初めには迎えに来た胡以晄に連れられて平南県山人村に身を隠した [98]。それは各地で上帝会員が結集し始めた時期と重なり、蜂起に向けての動きが本格化したことを示している。

団営令の発布に影響を与えたもう一つの要因は、広西における天地会蜂起の動向だった。1850 年 6 月に下凡した天兄は、「妖と妖が殺し合って疲れ切るのを待って、天父天兄が聖旨

を各地に発して事をなす」[99] と述べている。ここで「妖と妖が殺し合う」とは清軍と天地会軍の戦闘をさしていた。

別稿で述べたように、太平天国前夜の両広では各地で天地会が蜂起し、騒然たる状況になっていた。その被害を北京の都察院へ訴えた李宜用（南寧府挙人）らによれば、1849 年 5 月に張嘉祥（後の江南提督張国樑）が左江一帯で蜂起してから、1850 年 6 月に楊撈家（貴県橋墟人）が柳州右江一帯を襲うまで被害は数十県に及んだ [100]。また 7 月には広東英徳県の胡黄毛五軍が賀県に入り、知県鶴年を自殺に追い込んだ [101]。だがこれらの中で太平天国と関係が深かったのは陳亜貴の活動である。

陳亜貴は武宣県東郷平嶺村の人で、1846 年からに李観保（桂平県旧峽村人）、覃香晩（広東欽州人）らと協力して「広西艇匪の始まり」となった [102]。1849 年に入ると彼らは勢力を拡大して各地を荒らし回り、1850 年 8 月には修仁、荔浦両県城を陥落させた [103]。陳亜貴は「大王を名乗り、匪賊数千を擁して、頭に紅巾を包み、順天行道の文字を記した旗を立てた」[104] といい、荔浦県では「富室」を掠奪して福建商人の組織した団練と交戦した [105]。10 月に貴県に入った陳亜貴軍は、武宣県三里墟で潯州府知府顧元凱の率いる清軍に敗北した [106]。11 月に覃香晩の部隊と合流した陳亜貴は貴県黄練墟で再び敗北し、猪仔紫金山に逃れたところを桂平県の団長黎建勲に捕らえられたという [107]。

ハンバーグ『洪秀全の幻想』は「匪賊の頭目に陳亜貴なる者があった。彼ははるか以前から地方を騒がしていたが、ついに洪秀全の軍に自分の軍を合流させたい旨を、進んで伝えた。しかしこれが実行に至らぬ中に……、陳は事によって西へ赴き、台村の民衆のために捕らえられ、政府側の役人に引き渡された」[108] と述べている。陳亜貴が上帝会との連合を図ったのが事実かどうかは、太平天国自身の文献からは不明である。しかし『天兄聖旨』は 1850 年 12 月初めのこととして、次のような内容を載せている。

> 天兄は天父の命令によって兄弟たちに粥を食べさせ、その心を試そうとされた。図らずも大頭妖（すなわち大頭羊の張釗）に従って変心する者が現れた。そこで降臨して人々の前で次のように諭した……。今日の事業は天父が主催し、天兄が引き受けているのである。大頭妖の仲間になろうとする者は、悪魔の道に引き入れられる者だ。お前たちが本当に修練を積めば、粥を食うのも天により、食わないのも天によると考えるようになる。天に順うものは必ず栄える。いつも大頭妖のことを戒めとせよ。天父は必ずや大いなる栄光をお前たちに与えるだろう。[109]

ここで上帝会との連携を図った天地会首領は張釗、田芳（大鯉魚）、邱二嫂らで、新任の広西提督向榮と欽差大臣李星沅による反乱軍の鎮圧に脅威を感じていた [110]。だが彼らは上帝会の「粥を食う」規律の厳しさに耐えられずに離反し、やがて清軍に投降するか殺された [111]。ただ羅大綱（広東揭陽県人）[112] と蘇三娘（広東高州人）[113] だけが上帝会に加わり、

太平天国の猛将として活躍したことは有名である。

こうして見ると太平天国の金田団営は、様々な勢力がうごめき、しのぎを削る混乱の中から、周到かつ慎重な準備と行動によって進められたことがわかる。すでに楊秀清は天父下凡によって「大災難を世に降す」との預言をくだし、「八月以降は田があっても耕す人はいなくなり、家屋があっても住む人はいなくなるだろう。おまえたちは家族や親戚をつれて、この地に来たらしめよ」[114] という指示を会員たちに与えていた。

はたして 1850 年秋に入ると「八方に炎が起ち、もはや止むことはない」[115] という天兄の言葉が現実になった。8 月に石達開の率いる貴県の上帝会は桂平県の白沙墟に移動し、秦日綱ら白沙の会衆と共に 9 月に金田村へ移動した [116]。陸川県の上帝会も 8 月に賴九（陸川県陸茵村人）の指導のもとで北上を開始し、車田墟で黄文金（博白県旱坳村人）が率いる博白県の会衆と合流した [117]。彼らは鬱林州知州顧諧庚の率いる練勇を蛤母垌で打ち破り [118]、11 月に桂平県大洋墟を経由して潯江を渡り金田へ入った [119]。さらに象州の会員たちも譚要（石龍村人）を中心に行動を開始し、9 月に紫荊山へ向かった [120]。

いっぽう洪秀全らが身を隠していた平南県では、10 月に入って会衆の動員が始まった。山人村と花洲には営盤が築かれ、後に天王の側近となる蒙得恩親子（平南県馬嶺村人）や陳丕成（後の英王陳玉成）を初めとする藤県大黎郷の会員もここに集結した [121]。こうした上帝会の動きに反応したのは車旺村の翁振三で、団練を率いて上帝会に対抗したが敗北した [122]。知らせを受けた平南県知県の倪濤は、12 月 4 日に各地の団練や猺丁に花洲を攻撃させた。だが胡以晄はこれを打ち破り、上帝会の勢力はかえって拡大した [123]。

また潯州府城から副将李殿元が平南県思旺墟に進撃すると、11 月に突如健康を回復した楊秀清が指揮を取って迎撃作戦を展開した。12 月 27 日に金田村から派遣された上帝会軍 3,000 名は思旺墟に至り、李殿元の軍を撃退して署秦川郷巡検の張鏞を殺害した。翌日には洪秀全らが思旺墟に入り、会衆の護衛のもとで金田村に到着した [124]。いわゆる「迎主の戦い」は団営がひとまず完成したことを示す事件だったと言えよう。

ところで金田村に集まった上帝会について、同治『潯州府志』は次のように述べている。

> さきに賊に従った者は、おおむね皆が自ら望んで去ったが、上帝を拝んでいた者は必ず家族全員を引き連れ、財産を安く売り払った。その理由を尋ねたところ、「おらは太守だ、将軍だ！　おめえたちどん百姓とは訳が違うだ！」と答えた。その妻たちも周囲に微笑んで「私は貴婦人よ。あなたたち村の女と一緒にしないで！」と言った。これを聞いた人々はバカバカしさに笑いが止まらなかった。
>
> だが彼らは妖書に記された教えを厳しく守り、違反した者は家族であろうと殺す。最も犬を食うことを重んじ、戦いに勝利する度に犬の肉を食って祝う。賊の首領は頭に紅巾を巻き、旗は紅あるいは黄色である。五人、十人が一隊となって、五人のうち四人が倒れても、残る一人はなお勇敢に突撃して退くことを知らない。その教えに死ねば仙人

になれるとあるためである。[125]

蜂起にあたって成功後に官僚となることを約束するのは、中国の宗教反乱にしばしば見られた傾向であり、太平天国も南京到達後に金田団営の参加者に多くの褒賞を与えた。また参加時に会員たちが財産を処分したのも事実で、凌十八が結んだ契約書[126]が発見されているほか、李秀成は「陣営に加わる時は、上帝を拝んだことのある者は皆、家に火をつけて焼いてしまった」[127]と述べている。

いっぽう天条を守らない者に加えられた厳しい処罰については、『天兄聖旨』の中にいくつかの事例を見いだすことができる。9月に紫荊山で下凡した天兄は、「団営で天条を守らない者がいたら、杖数百の刑にすべきだ」[128]と宣言した。そして蜂起後の1851年3月にアヘンを吸った李庚祥を「重打一千」と打ちすえ、「雲中雪」すなわち死刑にするように命じた。また李庚祥の上官であった韋志顯（韋昌輝の一族）を監督不行届の罪で鞭打ちの刑にしたうえ、全軍に「今後反逆して命令を守らない者がいれば、先に殺して後に報告せよ」[129]との指令を出している。

金田村に到達した洪秀全は、1851年1月に5ヶ条からなる軍律を取り決めた[130]。だが下凡した天兄による会員の処罰は、はるかに厳しくかつ些細な理由によって行われた。例えば1850年4月には「乱言」をした謝享礼が「打一千」のうえ石の上に跪かせられ[131]、9月には「辯言乱真」「失礼で言葉も不順」だった范世光が「重責一百七十板」「重責一百」の刑に遭った[132]。また9月に象州の何連川らが指示を仰ぎに来たところ、天兄の質問に適切な答えをしなかったという理由で「板打一百」の罰を受けた[133]。さらに1851年4月に陳来が羅大綱の妻の金銀をくすねると、天兄はこの事実を暴いて激しく怒り、「もち米の土鍋ごはんを陳来に食べさせたら、地獄に落としてしまえ！」[134]と命じている。

いっぽう金田団営の時期には五軍（五旗）からなる軍制も作られ、会員たちは男女に分かれて五人を基礎単位とする戦闘集団に配属された。1851年3月の天兄下凡には軍長、百長、営長なる職名が挙がっており、前軍先鋒長の張瑲進は500名の兵を率いていた。さらに天兄は彼に対して「妖を殺す時は、決して二人、三人で先に行ってはならず、必ず一斉に度胸を据えて前に進め。敵前で退くことは許さない」[135]と命じた。1851年6月に清軍に捉えられた李進富は「もし逃げだして陣地に戻る者がいれば、頭目が探し出して直ちに殺した。毎回戦うたびに二、三十人が殺されたので、このため皆が必死で戦うようになった」[136]と供述しており、この命令が実際に行われていたことがわかる。

これら上帝会軍の厳しい軍規と旺盛な戦闘力は、会員に対する過酷な処罰や干渉と表裏一体の関係にあった。それらは何れも「死ねば仙人になれる」と説く上帝教の抱えていたユダヤ・キリスト教の不寛容や儒教の正統論がもたらした特質であり、これから誕生する太平天国に排他的かつ抑圧的な性格を刻み込むことになるのである。

小　結

本稿の内容は次のようにまとめられる。1847 年に紫荊山で上帝会の成功を知った洪秀全は、10 月に偶像破壊運動を開始した。その背景には彼の旧約に偏った聖書理解があり、ユダヤ・キリスト教思想がもつ不寛容や儒教的正統論の影響によって、偶像崇拝の否定を神仏の破壊という行動に結びつけた。またこの運動は廟信仰に結集していた有力移民たちの反発を買い、1848 年に王作新が馮雲山を捉えて告発する事件に発展した。結果は王作新の敗訴に終わったが、その実王作新は社会の変動を敏感に察知して対応を試みた地域リーダーとして評価出来ることを指摘した。

馮雲山が獄中にいた 1848 年に始まったのが楊秀清、蕭朝貴による天父天兄下凡であった。この事件は太平天国の歴史において重要な転機となったが、当時はエリート、非エリートの区別なく神意を問うという行為が広がりを持っており、その一例として 1856 年の徐徴による「菩薩賜諭」事件を取り上げた。また天父天兄下凡がもたらした最大の変化として、上帝会の宗教結社から政治結社への変質があった。本稿は太平天国期の広東における科挙エリートの抗官風潮を手がかりに、天父天兄下凡が洪秀全に与えた思想的影響について考察し、それは地方政府への不信感を募らせて知識人に清朝支配の正当性について疑問を抱かせ、体制内に止まることの必然性を相対化させたことにあると指摘した。

続いて本稿は上帝会の武装蜂起にむけての準備と、その過程で発生した様々な政治勢力との対立について分析した。その一つとして貴県で発生した来土械闘があり、本稿は 1841 年に広西西部の陽万土州で発生した客家とチワン族の衝突事件を分析した。その結果客家が高利貸によってチワン族の耕地を奪取したのは事実だが、客家も広東人の優位の中で成功を収められなかった人々であり、両者の対立には下層民の生き残りをかけた競争という側面が見られることを指摘した。また 1833 年に海南島で発生した黎亜義らの市場襲撃事件から、民族対立の最中でも漢族と少数民族が融合した事例が見られることを指摘し、石達開の母や妻に代表される少数民族の上帝会参加は、新しい民族的境界を生み出す過程として捉えることが出来ると述べた。

さらに本稿は上帝会と団練の衝突、陳亜貴に代表される天地会反乱を分析し、金田団営が洪秀全の親族が広西へ到着した 7 月末以後に段階的に進められたことを確認した。この団営は 1850 年 12 月に平南県思旺墟で発生した「迎主の戦い」によって一つの区切りを迎えたが、上帝会員に参加をうながす活動は蜂起後も続けられた。また本稿は団営時期の上帝会において会員に対する厳しい処罰や干渉が行われ、それが「勇敢に突撃して退くことを知らない」と言われた上帝会軍の戦闘力の高さと不可分の関係にあることを指摘した。それらはユダヤ・キリスト教思想の不寛容や儒教的正統論がもたらした遺産であり、太平天国に排他的かつ抑圧的な性格を刻み込んだのである[137]。

こうして見ると上帝会の金田団営へ至る歴史とは、各地で事情も異なっていた上帝会員たちの活動が、一つに合流して大きなうねりを作りだした過程とまとめることが出来よう。む

ろんその背景には、様々な政治勢力がしのぎを削る混乱の中で慎重かつ周到な準備を進めた洪秀全らの努力があった。また各地で天兄下凡をくり返し、会員の掌握に努めた蕭朝貴の功績も小さくなかったと思われる。李秀成は「道光三十年十月（1850 年 11 月）に金田、花洲、陸川、博白、白沙で、約さずして同じ日に起義をした」と述べたうえで、「このとき多方面にわたる天機の変化は、実に詳述できない程であり、このため上帝会の人々は益々深く信じた」[138] と回想している。綿密に準備された金田団営は人々の結束を強め、太平天国に緒戦の勝利をもたらすことになったのである。

註

1) 菊池秀明『広西移民社会と太平天国』【本文編】【史料編】風響社、1998 年。
2) 菊池秀明「洪秀全の挫折と上帝教――檔案史料からみた太平天国前夜の広東社会」学習院大学東洋文化研究所編『東洋文化研究』第 10 号、2008 年。
3) 簡又文『太平軍広西首義史』商務印書館、1944 年。同『太平天国全史』香港猛進書屋、1962 年。広西師範学院歴史系『金田起義』編写組『金田起義』広西人民出版社、1975 年。羅爾綱「金田起義史実考」北京太平天国歴史研究会編『太平天国史論文選』上冊、三聯書店、1981 年、224 頁。同「金田起義前夜」北京太平天国歴史研究会編『太平天国学刊』第 1 輯、中華書局、1983 年、28 頁。王慶成『太平天国的歴史和思想』中華書局、1985 年など。
4) 王慶成編註『天父天兄聖旨――新発現的太平天国珍貴文献史料』遼寧人民出版社、1986 年。
5) 鍾文典「拜上帝会闘争基地的創建」広東、広西太平天国史研究会編『太平天国史論文集』広東、広西人民出版社、1983 年。同「論太平天国革命発生在広西的原因」『太平天国学刊』第 1 輯、201 頁。同『太平天国人物』広西人民出版社、1984 年。同『太平天国開国史』広西人民出版社、1992 年。
6) 小島晋治『太平天国革命の歴史と思想』研文出版、1978 年。同『洪秀全――ユートピアをめざして』中国の英傑、第 10 巻、集英社、1987 年（のち『洪秀全と太平天国』岩波現代文庫、2001 年として再版）。同『太平天国運動と現代中国』研文出版、1993 年。市古宙三『洪秀全の幻想』汲古書院、1989 年。
7) Jonathan Spence, *God's Chinese Son: The Taiping Heavenly Kingdom of Hong Xiuquan*, (New York: W. W. Norton, 1996)（朱慶葆訳『天国之子和他的世俗王朝――洪秀全与太平天国』上海遠東出版社、2001 年）。
8) 菊池秀明「近代中国の二つの悲劇――宣教師ロバーツと太平天国」『歴史と地理』579 号、山川出版社、2004 年。王慶成「洪秀全与羅孝全的早期関係」『太平天国的文献和歴史――海外新文献刊布和文献史事研究』社会科学文献出版社、1993 年、398 頁。
9) Theodore Hamberg, *The Visions of Hung Siutshuen and Origin of the Kwangsi Insurrection*, (Hongkong, 1854), 34（青木富太郎訳『洪秀全の幻想』生活社、1940 年、85 頁）。
10) 曾国藩「粤匪を討つの檄」（西順藏編『原典中国近代思想史』第 1 冊、アヘン戦争から太平天国まで、岩波書店、1976 年、331 頁）。
11) 梁発『勧世良言』巻 1、真伝救世文、論世人迷惑于各神仏菩薩之類（中国社会科学院近代史研究所編『近代史史料』39 号、1979 年、3 頁）。
12) Eugene Powers Boardman, *Christian Influence Upon the Ideology of the Taiping Rebellion*, (Madison:

University of Wisconsin Press, 1952). 夏春濤『天国的隕落――太平天国宗教再研究』中国人民大学出版社、2006 年、288 頁。

13) 洪仁玕『太平天日』中国近代史資料叢刊『太平天国』2、神州国光社、1952 年、646 頁（西順藏編『原典中国近代思想史』第 1 冊、アヘン戦争から太平天国まで、岩波書店、1976 年、189 頁）。また王慶成「拜上帝会釈論」はバーゼル伝道会の雑誌に掲載された李正高の証言として、洪秀全はキリストによる罪の赦しについて理解が足りなかったとしている（『太平天国的歴史和思想』56 頁）。

14) 『欽定旧遺詔聖書』出麦西郭伝巻 2、第 20 章、中国近代史資料叢刊続編『太平天国』2、広西師範大学出版社、2004 年、77 頁。

15) 『欽定旧遺詔聖書』利未書巻 3、第 26 章、続編『太平天国』2、129 頁。

16) 羅爾綱『増補本李秀成自述原稿注』中国社会科学出版社、1995 年、101 頁。

17) 菊池秀明「太平天国と歴史学――客家ナショナリズムの背景」岩波講座『世界歴史』第 20 巻、アジアの近代・19 世紀、岩波書店、1999 年、151 頁。

18) 趙翼『簷曝雑記』巻 3。ここで趙翼は広西西部のチワン族に見られる歌垣の習俗を批判した。

19) A. F. Lindrey, *Ti-Ping Tien-Kwoh: The History of the Ti-ping Revolution, Including a Narrative of the Author's Personal Adventures*, 2 vols., (London: Day & Son, 1866), 567（増井経夫・今村与志雄訳『太平天国――李秀成の幕下にありて』第 4 冊、平凡社東洋文庫、1964 年、264 頁）。

20) 鍾文典「太平天国起義与郷土宗教」『広西師範大学学報』1988 年、1 期、1 頁。

21) 民国『桂平県志』巻 15、紀地、壇廟。同書、巻 31、紀政、風俗。

22) 2007 年桂平市調査記録。この調査には唐曉濤氏（中山大学歴史人類学系）が同行し、多くの教示を得た。それによると桂平市北岸では現在も三界廟、甘王廟、玉皇廟、劉大姑、盤古廟、三宝寺、赤峰廟、古到廟、谷山廟、賓山寺などで遊神儀礼が行われているという。

23) 『始建三聖宮碑記』道光元年 (1821) 立。碑文はもと紫荊郷長田村雷廟内にあったが、1976 年に金田の太平天国起義記念館に移された。この碑文は保存状態が悪く、1950 年代の広西省文史調査団による報告書『太平天国起義調査報告』（三聯書店、1956 年、109 頁）は本文部分を収録しなかった。今回は唐曉濤氏が判読したものを活用させて頂いた。記して感謝したい。

24) 菊池秀明「金田団営の前夜――桂平県紫荊山区における移住と拜上帝会」『広西移民社会と太平天国』【本文編】449 頁。また『始建三聖宮碑記』の寄付者リスト部分。

25) 合水『武城曾氏族譜』民国 33 年修、合水村曾家寧蔵。また王慶成「訪問金田、紫荊」『太平天国的歴史和思想』508 頁。

26) Hamberg, op. cit., 38（青木富太郎訳書、94 頁）。

27) 方玉潤「星烈日記」『太平天国史料叢編簡輯』第 3 冊、中華書局、1961 年、82 頁。

28) 光緒『潯州府志』巻 49、列伝、武宣県、王徳欽、広西区図書館蔵。また広西師範学院史地系『太平天国起義調査資料』（油印本）、1973 年、33 頁。

29) 黄体正については菊池秀明「客籍エリート集団の形成と変容」『広西移民社会と太平天国』【本文編】63 頁。

30) 周天爵奏、咸豊元年四月二十二日、中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』第 1 冊、光明日報出版社、1990 年、423 頁。鄒鳴鶴奏、咸豊元年十一月初五日、同、第 2 冊、482 頁。またこの時の馮雲山の訴状は李孟羣「鶴唳集」に紹介されている（方玉潤「星烈日記」『太平天国史料叢編簡輯』第 3 冊、83 頁）。

31) 『天兄聖旨』巻 1、己酉年九月十一日の条に「天兄因黄為政、吉能勝在平南受苦、欲安衆等之心、

使之科炭救護」とある。この時天兄は吉能勝の親族らに対して、「朕当日在番郭被人釘死十字架、有誰人知乎？　越苦越好、爾們不必慌也。總要兄弟齊心、科銭米救護政、勝二人也」（続編『太平天国』2、258 頁）とあるように、イエス・キリストの受難になぞらえながら会員たちに苦難の二人を支援するように命じている。吉能勝は北伐軍主将の一人である吉文元の同族とも考えられるが、詳細は不明。また同書巻 2、七月二十二日の条では、信宜県で会員数名が捕らえられたことを報告した葉芸亭に対して「現回去科炭流連、救被捉数人莫致飢餓先」と指示している（同書、290 頁）。なお王慶成「『天父聖旨』、『天兄聖旨』和太平天国歴史」中国社会科学院近代史研究所編『近代史研究』1985 年、1 期（小島晋治等訳、中国民衆史研究会編『老百姓の世界』3, 4 号、1985, 1986 年所収）を参照のこと。

32) 鍾文典『太平天国人物』楊秀清、115 頁。菊池秀明「金田団営の前夜」『広西移民社会と太平天国』【本文編】462 頁。

33) 鍾文典『太平天国人物』蕭朝貴、168 頁。菊池秀明「金田団営の前夜」『広西移民社会と太平天国』【本文編】477 頁。なお蕭朝貴の生みの父親は蔣万興といい、武宣県上武蘭村の人。幼王詔旨、太平天国歴史博物館編『太平天国文書彙編』中華書局、1979 年、71 頁を参照のこと。

34) Hamberg, op. cit., 45（青木富太郎訳書、116 頁）。

35) 『天情道理書』『太平天国』1、365 頁。

36) 『天兄聖旨』巻 1、戊申年九月間、続編『太平天国』2、258 頁。

37) 光緒『貴県志』巻 8、紀文、梁慶祥「闢邪説」。

38) 王慶成「訪問金田、紫荊」『太平天国的歴史和思想』505 頁。

39) 『原道救世歌』『太平天国』1、89 頁。

40) Hamberg, op. cit., 45（青木富太郎訳書、116 頁）。

41) 武内房司「清末四川の宗教運動――扶鸞、宣講型宗教結社の誕生」『学習院大学文学部研究年報』37 号、1990 年。

42) 劉世馨『粤屑』巻 3、扶乩論詩文。

43) 徐徴稟、月摺檔、咸豊六年八月中、103 頁。「菩薩賜諭」、同、106–2 頁。徐徴履歴、同、109 頁、共に台湾国立故宮博物院蔵。

44) 収得城池地土夢兆詔および打死六獣夢兆詔『太平天国文書彙編』49, 50 頁。

45) 例えば次のような例がある。「是時［嘉応］州城士民、聞兵潰皆欲棄城而走。適方軍中有巫、言事輒中、潮人謂之降童。是日巫復為神所附、披髪執剣、以利刃割其舌、置之神前、須叟取以自粘、舌復如故、據案告衆曰：救兵當於某日到、賊無能為、當死守以待、若竄走、則無噍類矣。由是衆心始定、相与登陴而守」（朱用孚『摩盾余談』巻 1、潮嘉防剿紀略『太平天国史料叢編簡輯』第 1 冊、100 頁）。また顧汝孚『海虞賊乱志』も人々が太平軍の攻撃について「扶乩」に問いかける場面を記している（『太平天国』5、353 頁）。

46) Hamberg, op. cit., 46（青木富太郎訳書、117 頁）。その原文は “One of the Wang clan” とあり、黄姓か王姓か確定できない（客家語ではほぼ同じ発音となる）。しかし『天兄聖旨』巻一、戊申年九月間に「黄二妹自外入庁、西王見有一妖跟入。西王奮身戦妖、連戦数場」（続編『太平天国』2、245 頁）とあり、恐らくは同一人物であろう。

47) 『天兄聖旨』巻 2、庚戌年七月二十九日・八月初七日、続編『太平天国』2、292, 297 頁。

48) Hamberg, op. cit., 46（青木富太郎訳書、117 頁）。

49) 『天兄聖旨』巻 1、庚戌年九月間、続編『太平天国』2、246 頁。

50) 『天情道理書』『太平天国』1、366 頁。

51) Hamberg, op. cit., 46（青木富太郎訳書、117 頁）。
52) 小島晋治「十八世紀末～十九世紀中葉の民間宗教、民衆宗教の思想――日本と中国」『太平天国運動と現代中国』145 頁。
53) 神田千里『信長と石山合戦――中世の信仰と一揆』吉川弘文館、1995 年。
54) 鍾文典『太平天国人物』韋昌輝、196 頁。菊池秀明「広西チワン・漢両民族の移住と漢化――桂平県「講壮話」韋昌輝の拝上帝会参加」『広西移民社会と太平天国』【本文編】347 頁。
55) 『天兄聖旨』巻 1、己酉年八月二十三日、続編『太平天国』2、257 頁。
56) 『天兄聖旨』巻 2、辛開年十月二十日、続編『太平天国』2、320 頁。
57) 『天情道理書』『太平天国』1、366 頁。
58) 『天兄聖旨』巻 1、戊申年十一月中旬、続編『太平天国』2、249 頁。
59) 『天兄聖旨』巻 1、庚戌年六月二十日、続編『太平天国』2、284 頁。
60) 王慶成「拜上帝会釈論」『太平天国的歴史和思想』58 頁。小島晋治『洪秀全と太平天国』94 頁。夏春濤「八面它起、起不復息：金田起義的爆発――兼論上帝教与中国民間宗教的融合」『天国的隕落』35 頁。
61) 『原道覚世訓』『太平天国』1、97 頁。
62) 洪仁玕『欽定英傑帰真』『太平天国』2、570 頁。
63) 徐広縉等奏、咸豊元年三月初九日、反清項 8946-17 号、中国第一歴史檔案館蔵。同奏、咸豊元年七月初二日批、月摺檔、台湾国立故宮博物院蔵。
64) 徐広縉等片、咸豊元年七月初二日批、月摺檔、台湾国立故宮博物院蔵。
65) 『天兄聖旨』巻 1、戊申年十二月初七日、続編『太平天国』2、252 頁。
66) 『天兄聖旨』巻 1、己酉年十一月二十七日、続編『太平天国』2、263 頁。
67) 『天兄聖旨』巻 1、己酉年十二月初一日、続編『太平天国』2、264 頁。胡九妹は盧賢拔（平南県花洲人）の妻で、1854 年に陳宗揚らと共に夫婦密会を告発されて処罰された。
68) 『天兄聖旨』巻 1、庚戌年正月十六日、続編『太平天国』2、272 頁。
69) 『天兄聖旨』巻 1、庚戌年二月二十七日、続編『太平天国』2、277 頁。
70) 『天兄聖旨』巻 1、庚戌年二月二十三日、続編『太平天国』2、276 頁。
71) 『天兄聖旨』巻 1、庚戌年二月二十三日、続編『太平天国』2、276 頁。
72) 『天兄聖旨』巻 1、己酉年正月十八日、続編『太平天国』2、253 頁。ちなみにこの時は「天将天兵」の力によって難を免れたとある。
73) 『天兄聖旨』巻 1、己酉年八月初六至初十日、続編『太平天国』2、255 頁。また九月二十七日の条は、王玉綉（洪秀全のいとこ）は洪秀全らの避難という措置に「嗟怨之意」があり、下凡した天兄が彼をたしなめたことが記されている（同書、259 頁）。
74) 『天兄聖旨』巻 1、己酉年十二月二十七日および二十九日、続編『太平天国』2、266, 267 頁。
75) 羅爾綱『増補本李秀成自述原稿注』107 頁。
76) 菊池秀明「太平天国前夜の広西における移住と民族――貴県の場合」神奈川大学中国学科編『中国民衆史への視座』東方書店、1998 年、83 頁。
77) 周之琦奏、道光二十二年六月二十三日『宮中檔道光朝奏摺』第 11 輯、764 頁。台湾国立故宮博物院蔵。
78) 光緒『百色庁志』巻 8、補録。
79) 賀県客匪擾害情形、附録客匪偽示、咸豊四年六月十二日、佐佐木正哉編『清末の秘密結社』近代中国研究委員会、1967 年、240 頁。この他に貴県での械闘のきっかけをつくった大墟教子嶺村

の温汝玉は、18 世紀末に同姓結合に頼って入植した下層移民の子孫であった（菊池秀明「太平天国前夜の広西における移住と民族――貴県の場合」）。

80) 羅爾綱『増補本李秀成自述原稿注』102 頁。

81) 『天兄聖旨』巻 1、己酉年十二月二十九日、続編『太平天国』2、267 頁には「周鳳善遭劫」とあり、彼の家が周鳳鳴らに襲撃されたことを伝えている。また石達開の母周氏と周鳳鳴の関係については菊池秀明「太平天国前夜の広西における移住と民族――貴県の場合」。

82) 盧坤奏、道光十三年十二月初八日・十四年三月初一日、軍機處檔案 66709・67598 号、共に台湾国立故宮博物院蔵。

83) 菊池秀明「太平天国前夜の台湾における反乱と社会変容――道光十二年の張丙の乱と分類械鬪を中心に」長谷川清・塚田誠之編『民族の移動と文化の動態――中国周縁地域の歴史と現在』風響社、2003 頁、195 頁。

84) 徐広縉等奏、咸豊元年七月二十二日批、月摺檔、台湾国立故宮博物院蔵。

85) 『天兄聖旨』巻 1、庚戌年正月初二日、続編『太平天国』2、268 頁。一般に来土械鬪は 1850 年夏に始まったとされるが、「石達開自述」は「道光二十九年因本県土人趕逐客人、無家可帰」と述べている（『太平天国』2、780 頁）。

86) 菊池秀明「太平天国前夜の広西における移住と民族――貴県の場合」。

87) 『天兄聖旨』巻 1、庚戌年二月二十三日の条に「李炳章又在平南妖官捏告胡以晃等」とある（続編『太平天国』2、276 頁）。李炳章は広東嘉応州出身の客家で（1990 年平南県調査記録）、光緒『平南県志』に「武庠、加千総職銜」とある。1855 年に天地会軍に敗れて死んだ（巻 21、伝記）。

88) 抄呈信宜懐郷司巡検陳栄親呈凌十八始末縁由各片『清末の秘密結社』183 頁。抄呈茂名胡令交呈凌十八節略、同、181 頁。

89) 光緒『信宜県志』巻 8、記述三、兵事。朱用孚『摩盾余談』『太平天国史料叢編簡輯』1、138 頁。

90) 抄呈信宜懐郷司巡検陳栄親呈凌十八始末縁由各片『清末の秘密結社』184 頁。光緒『信宜県志』巻 8、記述三、兵事。ここで邱賢参、余士楨、孔伝東一族はいずれも客家または客家に同化した漢族移民であり、新図内部のリーダーシップをめぐって凌十八一族と競争していた（菊池秀明『広西移民社会と太平天国』【史料編】641 頁）。

91) 『天兄聖旨』巻 2、庚戌年七月二十二日、続編『太平天国』2、289 頁。

92) 『天兄聖旨』巻 2、庚戌年八月十三日、続編『太平天国』2、289 頁。この事件は耕牛事件と呼ばれ、来土械鬪の性格をも帯びていた（Hamberg, op. cit., 51、青木富太郎訳書 129 頁）。

93) 『天兄聖旨』巻 2、庚戌年七月二十二日および九月二十五日、続編『太平天国』2、289, 305 頁。

94) 張徳堅『賊情彙纂』巻 4、偽軍制上、偽家冊式には「梁立泰、年三十四歳、広西潯州府桂平県白沙墟人、庚戌年七月在金田入営、八月封前営長東両司馬」とあり、1850 年 8 月に金田で団営に参加した事例があることを伝えている（『太平天国』3、126 頁）。

95) 抄呈信宜懐郷司巡検陳栄親呈凌十八始末縁由各片『清末の秘密結社』184 頁。光緒『信宜県志』巻 8、記述三、兵事。また『洪寨余姓族譜』（同治十年修、洪冠洪上村余昌材蔵）には「道光三十年庚戌歳秋、遭凌逆猖獗、□士禎奉命進剿陣亡、我賊祠宇房屋被焚三十餘家、殺斃練勇並族人十餘命」とあり、余士禎一族が大きな被害を出したことを伝えている（菊池秀明『広西移民社会と太平天国』【史料編】644 頁）。

96) 『天兄聖旨』巻 2、庚戌年八月二十二日、続編『太平天国』2、303 頁。

97) 『天兄聖旨』巻 1、庚戌年六月二十日、続編『太平天国』2、284 頁。

98) 『天兄聖旨』巻 2、庚戌年七月十九日・七月二十四日、続編『太平天国』2、287, 290 頁。

99) 『天兄聖旨』巻1、庚戌年四月二十二日、続編『太平天国』2、280頁。

100) 広西南寧府宣化県挙人李宜用等呈文、花沙納等奏附件、道光三十年八月二十九日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、光明日報出版社、1990年、35頁。

101) 軍機大臣、道光三十年八月初九日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、17頁。李星沅奏、咸豊元年三月初十日、同、289頁。民国『賀県志』巻7、宦績。

102) 民国『武宣県志』巻5編、前事。

103) 鄭祖琛等奏、道光三十年七月二十七日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、15頁。徐広縉奏、道光三十年八月初七日、同、18頁。

104) 広西慶遠府生員莫子升等呈文、花沙納等奏附件、道光三十年八月二十九日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、36頁。

105) 民国『荔浦県志』巻3。

106) 鄭祖琛等奏、道光三十年九月二十六日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、62頁。また光緒『潯州府志』巻56、紀事、広西区図書館蔵。

107) 諭内閣、道光三十年十月十七日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、80頁。民国『桂平県志』巻33、紀事下編。

108) Hamberg, op. cit., 54（青木富太郎訳書、135頁）。なお覃漢陽供、咸豊元年閏八月十六日によると、永安州時代の太平天国には陳亜貴の弟である陳得清がおり、400名の部下を率いていたという。彼らの一部が上帝会に加わったと考えられる（『清政府鎮圧太平天国檔案史料』2、306頁）。

109) 『天兄聖旨』巻2、庚戌年十一月初旬、続編『太平天国』2、305頁。なお天地会首領たちの殆どが上帝会の厳格な規律について行けず、離反したというエピソードはHamberg, op. cit., 55（青木富太郎訳書、137–8頁）にも記されている。また李秀成によると、張釗、田芳らは「到金田見拜上帝之人不甚強壮、非是立事之人、故未投也。後投清朝向提臺」とあるように、上帝会の人々がひ弱であると感じて清軍に投じたという（羅爾綱『増補本李秀成自述原稿注』108頁）。

110) 清朝は1850年10月に元広西提督閔正鳳を「畏葸無能、縦賊養寇」の罪で北京へ送り、11月には広西巡撫鄭祖琛を解任した（諭内閣、道光三十年九月二十二日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、56頁および軍機大臣、道光三十年十月初四日、同、84頁）。また一度は林則徐が欽差大臣に任命されたが、赴任途上の11月に病死した（徐継畬奏、道光三十年十月二十五日、同、86頁）。

111) 張釗、田芳らの清軍投降については徐広縉奏、咸豊元年三月初九日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、80頁。また「広西遊匪投誠稟稿」は「蟻等生逢盛世、悉属良民……、以頻年水患、力農則粒米難求、貿易無資工作、則投身匪党、邇来西省、欲覓枝棲」「可恨者、邇年兵差需索鄉間、又假名設立壯勇、以啓良善之禍胎、開兇孽之悪隙、名雖美極、罪不容誅。彼以奉官結党、任意苛求、横行訛索、或因私怨而架捏会匪、或因重賞而捏造通詳、焚屋抄家、劫罪勒命。是以聚衆投生……、非行劫掠、無以営生、不抗王師、何以保命」とあるように、彼らは生計の道を求めて広西へ至ったが、地方政府の悪政によって追いつめられ、造反するに至ったと述べている（『清末の秘密結社』1頁）。なお邱二嫂は1850年9月に貴県で団練に殺され（光緒『貴県志』巻6、紀事）、張釗、田芳も1853年までに粛清された。

112) 鍾文典『太平天国人物』羅大綱、419頁。羅大綱は1847年に平楽府城を攻撃した羅三鳳反乱軍のメンバーで、荔浦県馬嶺街を拠点とした（菊池秀明「動乱の幕開け——太平天国前夜の広西における下層移民と天地会系結社の活動」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』34号、2008年）。また彼と呉如孝はギュツラフらが広州に設立した漢会（あるいは福漢会、

Chinese Union または Christian Union）のメンバーだったという（王慶成「拜上帝会釈論」『太平天国的歴史和思想』53 頁）。

113) 鍾文典『太平天国人物』蘇三娘、470 頁。

114) Hamberg, op. cit., 47（青木富太郎訳書、120 頁）。

115) 『天兄聖旨』巻 2、庚戌年九月初十日、続編『太平天国』2、303 頁。

116) 光緒『貴県志』巻 6、紀事。民国『桂平県志』巻 33、紀事下編。それらによると上帝会は白沙で武器の鋳造を行ったが、広西当局が来土械闘の処理を行なっていたため、白沙の団練は手出し出来なかったという。

117) 民国『陸川県志』巻 21、兵事編。賴九は本名を賴世挙といい、出稼ぎ先の貴県で上帝会に入った（菊池秀明「太平天国前夜の広西における移住と民族――貴県の場合」）。『天兄聖旨』巻 2、庚戌年六月二十日の条は、賴世挙らが洪秀全、馮雲山を陸川県へ連れて行こうとしたが、天兄の許可が下りなかったことを伝えている（続編『太平天国』2、283 頁）。また黄文金については『廉江上県黄氏族譜』巻 10 に「文金：太平天国堵王、配李氏」とある（広西区通志館蔵）。昭王黄文英（族譜では黄文玉）の供述も「身是広西博白県人、年二十六歳、黄文金是我胞兄」と述べている（続編『太平天国』2、439 頁）。

118) 光緒『鬱林州志』巻 18、紀事。それによると顧諧庚の軍が蛤母垌へ至ったところ、団練を装っていた上帝会軍の奇襲を受けて大敗し、福綿団団総の唐桂攀が戦死した。

119) 鄭祖琛奏、道光三十年十一月十三日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、103 頁。この上奏は陸川、博白の上帝会員が金田からの支援を受けて潯江を渡河したのは 11 月 21 日から 24 日のことだったと記している。

120) 覃元蘇「象州乱略記」太平天国革命時期広西農民起義資料編輯組『太平天国革命時期広西農民起義資料』上冊、中華書局、1978 年、130 頁。ただしこの時全ての会員が金田に結集した訳ではない。蜂起後に太平軍が武宣県、象州に進出した理由の一つは、李秀成が「移営上武宣東郷、三里、招齊拜上帝之人、招齊武宣之人、又上象洲招齊拜上帝人馬」（羅爾綱『増補本李秀成自述原稿注』108 頁）と述べたように、団営に間に合わなかった上帝会員を糾合することにあった。なお王慶成「金田起義記」『太平天国的歴史和思想』159 頁を参照のこと。

121) 「幼贇王蒙時雍致二叔上国等家書」に「九月十三日（10 月 17 日）花洲団営、姪於是月十八日（10 月 22 日）由花黄水之紫微村張五家起行赴花洲。十月初一日（11 月 4 日）打大仗」とある（『太平天国文書彙編』472 頁）。また蒙得恩親子が上帝会に参加した理由については鍾文典『太平天国人物』蒙得恩、311 頁。陳玉成については菊池秀明「広西藤県北部の移住と太平天国」【本文編】『広西移民社会と太平天国』493 頁。

122) 同和田貴村『翁氏族譜』に「（第三十一代翁）振三、監生、妣陳孺人、生七子、朝夢、朝球、道光三十年洪逆乱殉難」とある（翁昌玉蔵）。なお彼らは原籍広東興寧県の客家で、胡以晄は彼らに食料を供出するように命じたが、従わなかったという（1990 年調査記録）。

123) 光緒『平南県志』巻 18、団防録。それによると倪濤は兵丁および恵政里の団練、猺丁を動員して攻撃したが、56 名の死者を出して敗北した。また上帝会は 12 月 23 日に花良村の団総である陳宗淮の家を襲い、30 日には羅掩村を攻撃して団長の覃展成を殺害した。ここで陳宗淮は太平天国に参加した陳宗揚（雷廟村人）の族人で、覃展成の弟である覃展虎らも上帝会に入っていた（鍾文典『太平天国人物』胡以晄、296 頁および同『太平天国開国史』106, 134 頁）。

124) 労崇光等奏、道光三十年十二月初八日『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1、117 頁。また光緒『平南県志』巻 18、団防録。

125) 同治『潯州府志』巻27、平寇略。

126) 菊池秀明「両広南部における客家移民と国家」【本文編】『広西移民社会と太平天国』322頁。陳啓著・陳坤中「凌十八出売家産与大寮起義」記念太平天国起義140周年太平天国史国際学術研討会参加論文、1991年。

127) 『増補版李秀成自述原稿注』117頁

128) 『天兄聖旨』巻2、庚戌年八月初五日、続編『太平天国』2、296頁。

129) 『天兄聖旨』巻2、辛開年二月二十八日、続編『太平天国』2、308頁。

130) 五大紀律詔、庚戌十二月初旬『太平天国文書彙編』31頁。その内容は「一、遵条命、二、別男行女行、三、秋毫莫犯、四、公心和儺、各遵頭目約束、五、同心齊力、不得臨陣退縮」。

131) 『天兄聖旨』巻2、庚戌年八月初九日、続編『太平天国』2、299頁。

132) 『天兄聖旨』巻1、庚戌二月二十八日、続編『太平天国』2、278頁。

133) 『天兄聖旨』巻2、庚戌八月十九日、続編『太平天国』2、301頁。

134) 『天兄聖旨』巻2、辛開年三月十八日、続編『太平天国』2、309頁。

135) 『天兄聖旨』巻2、辛開年二月二十八日、続編『太平天国』2、308頁。

136) 李進富供、F.O. 931 1041、英国National Archives蔵。また続編『太平天国』3、272頁。

137) ここから次の二つの結論が導かれよう。第一に上帝会はいわゆる「邪教（カルト宗教）」ではない。なぜなら元々ユダヤ・キリスト教思想はその内部に一神教ゆえの排他的な性格を抱えているからである。第二に上帝会がキリスト教から受容した不寛容という特質は、20世紀の中国がヨーロッパから受容したマルクス主義——世俗化されたユダヤ・キリスト教——にも見られた傾向であった。中国共産党であれ、中国国民党であれ、「反革命」のレッテルを張られた人間に対する容赦ない肅清という中国の政治勢力がもつ抑圧的な体質は、彼らが太平天国の後継者であったことを悲劇的な形で物語っている。

138) 『増補版李秀成自述原稿注』108頁。